

熊谷陣屋

昭和三十八年三月於東京座、中村芝翫主演

鈴木春浦

〈出典：『歌舞伎の型』宝文館、昭和2年10月〉

床の「待間程なく」で揚幕の内から「旦那のお帰り一」と呼ばせ、^ゝ熊谷次郎直実」で、又「お帰り一」と呼ばせて、^ゝ流石に猛き^{ものふ}武士も一」で花道へ出て参ります。

顔の^{こしらえ}拵は団十郎と格別の相違なく、矢張^{やはりと}砥の粉の薄肉で、眉毛尻から鬢まで隈を取り、^{めがしら}眼頭と下^{まぶた}眼瞼へ墨を入れ、頬から顎へかけて^{せいたい}青黛で髭の跡を作り、墨で口を割るのも殆んど同様です。鬢は^{なまじめ}生締、紺地錦赤糸七宝の袴、黒本天の^{きつけ}著附に^{ついで}対鳩の金紋、白羽二重の二枚^{したまき}下著、^{おうこんづくりしゆぎや}黄金作朱輪の大小を帯び、卵黄色の足袋に福草履を穿き、物思いに沈んだ体で目を閉ぶり、腕組をし乍ら床の^ゝ物の哀を今ぞ知る」迄の間に花道の六四の辺へ来て止り、眼を開き、もう陣屋へ来たという心持で組手を解き、左の手で刀を直し、首を^{ちよつと}一寸左右へ振り、^{つきそで}突袖をし、舞台へ来て、枝折門の外に建てある制札を黙読し、ツカツカと内へ入って来て軍次の後に女の居るのを怪み、^{はじめ}始めて相模だと知り、床の^ゝ妻の相模を尻目にかけて」で一段に右足を掛ける途端に^{うしろむき}後向にグイと相模を睨み付け、^ゝ座に直れば」で左手で太刀を拔出して右脇に置き、腰を下して軍扇を前に突立てる。軍次が景高の待つて居る事を告げるので、「ムウ詮議とは何事やらん、其方は奥に行き梶原殿を^{もてな}饗し申せ」を普通に、「行け行け」を軽く言い、軍次の躊躇するので苛立って、「ハテ何を猶予、行けと申すに」と強く引張って云います。軍次が引込むと、熊谷は稍下手を向き、「コリヤ女房、そちやここへ何しに来た、国元出立の^{みぎり}砌、陣中へは^{たより}便も無用と堅く^{もうしつけ}申付置きたるに、^{ことば}詞を背くといい、女の身で」と続け、「陣中へ来る事」と切り「不届」と短く詰め、「至極の女め」と^{おおき}大きく引伸して云う。相模が小次郎の安否を問うと、「戦場へ赴くからは」云々の^{せりふ}白があつて、「若し討死でもいたしたら何とす一るう」と^{きつ}屹となり、尚下手を向きます。床の^ゝ健気な詞に顔色直し」で正面に向直り、「先ず小次郎が手柄と言へば、平山の武者所と争い、^{ぬげがけ}拔駟の⁽⁷⁷⁾高名」を勢よく、「手傷少々」を緩く憂を持たせ、「負うたれども」と軽く伸し、「末代迄の○家の誉さァー」と大きく引張る。相模が「シテ其手傷は、急所ではござりませぬか」と急込むのを、「コリヤコリヤコリヤ何を申す」と言い乍ら陣扇で一寸相模の顔を指し、要で下をトントントンと叩き、「未だ手傷を悔む顔付、若し急所ならおみやどうする」と手強く突込み、小次郎と共に往ったかと聞くので、「オオサ危しと見るより軍門に駈入り、小次郎を無理に引立て小脇に^ひ引^{いだ}抱き、我陣屋へ連帰り、^{それがし}某は又其軍に搦手の大将、無官太夫敦盛が首を取って」と早目に云い、「功名手柄をいたしたわいイ」と得意気に声高に云うと、床の^ゝ後に聞居る御台所」云々で藤の方が「熊谷やらぬ」と突掛るを、山形にあしらい、右に持ちたる陣扇の要で懐剣を打落し、藤の方が前へのめり出る所を、左で襟髪を持って引寄せ、「ヤァ陣中にて敵呼わり、不届至極の女め」と荒立つと、相模が藤の方だというので少しく驚き、「ナニ」と云い乍ら相模の顔を見、これがと半信半疑の体で、扇の要で二度ほど藤の方を指し、左手で

藤の方の右手を取り、引起す様に高く上げて顔を覗き込み、「誠にィ」といたく驚いた調子で云い、陣扇をピッタリと下に置き、床の^ゝ思い掛けなき御対面と」で藤の方が又切掛けるのを矢張山形に外し、左の手を大きく拡げて伸し、足を割り、三四足上手へ藤の方を押して行き、小刀を前へ投出し、早足で中央に戻り、床の^ゝ飛退き敬い奉る」で袴の股立を取り、^{そく}東に飛退って腰を下すと同時に、左手を大きく拡げて屹と見得をして、左手を下し、上手向に両手を突いて平伏します。^{りょうじよ}両女の白の間正面に向き直り、床の切に「ヤア愚か、おろ一かァー」と重々しく引張り、「ソモ此度の戦、敵と目指すは平家の一門、敦盛は扱置き、^{しのぎ}鎧を削るに誰彼の、用捨がなろうかァ」と強くキツパリと云うと、^{ふたり}両女が詰寄るので、「テエ、たわけものオめ」と相模を^{たしな}奢め、直に気を替え、「イヤノウ、藤の御方、戦場の儀は、是非なしと、御諦め下さるべし」と云って少しく頭を下げ「其日の戦のあらましと、敦盛卿を討ったる」で又藤の方が息組むのを、「サ、御物語な仕らん、先ずゥ」で左手を伸して止め、「相模、其方もこれにて承われ」と云いながら、床の^ゝ物語らんと座を構え」で左から膝を進めて正面を向き、要を下にして陣扇を前に突立て、^{りょうて}両掌を其上に重ねて極る。そこで「扱も去ぬる六日の夜、早や東雲と明くる頃」を普通に、「一二を争い抜駈の平山熊谷、アレ討取れよと」を早目に云い「打って出たる平家の軍勢」で向うを透し見る振をし、「中に一ト際優れし緋緘」で右に持ちたる陣扇を真直に伸して向うを指し、次に陣扇を引いて左の掌を敲き、其儘起して左の膝に突立て右手で持添え、矢張向うを見込んで居ます。(或時は、陣扇をトンと下に突立て、其上に両掌を載せて向を見込んで居たと思う。)^{あしら}「さしもの平山、応対いかね」の間も同然で、「浜辺を——さして」で陣扇を右に持ち、左から右へ二度返し、右足を前へ伸し、同時に扇を左に持替え、「逃出す」で^{いと}絃に連れて左から右へ小刻に陣扇を使い、右の足を引いて見得、「ハテ健気なる若武者や」から「熊谷これに控えたり」まで^{いと}絃に乗り、「返せ戻せ、オオイオオイ」で^{おわり}終の「オオイー」は語尾に力を入れ、始よりは一段^{はっ}張て遠くへ聞えるように云い、床の^ゝ扇を持って打招けば」で左に持ちたる扇を右手を添えて開き、左足を踏出し、後向に右に扇を持って打招き、直ぐに向直り、右足を踏出し^{いと}絃に連れて開いた扇を、始は左右に終には上下に軽く右の手頸で煽り、それを膝へ引付け、開いた儘斜に持って見得をし、「駒の^{かしら}頭を立直し」で両手で手綱を搔繰る形、「波の打物二打三打」で扇を窄めて刀を抜く様をし、二度天地に斬結び、床の切に窄めた儘右手で扇の要を握り、内拳を内に向け真直に右扇より高く上げ、左手を拡げて突張り、釣合を取り再び見得、「いでや組まん」と大きく、床の^ゝいでや組まんと馬上ながらもむんず組み」で扇の要を右脇に付け、左拳を突張り、押合う振をし、「両馬が間にどうと落ち」で扇を開き、煽りてピッタリと下へ伏せ、右の掌で押え付け、藤の方へ^{おもい入れ}思入をし、両手を膝の上に置きます。藤の方の其若武者を組敷いてかと問うので「されば御顔をよく見奉れば、鉄漿黒々と細眉に、年はいざよう我子の^{としばえ}年輩」をシンミリした調子にいて、一寸相模を見、「定めて^{ふたおやおわ}両親在しません、其御嘆は如何ばかりと、子を持ったる身の思いの余り」と早めに続け、「上帯取って引立て」と切り、床の^ゝ塵打払い」で左の袂を開いた陣扇で二三度軽く払って、草摺の塵を払う形を見せ、「早や落給え」と少しく頭を下げて云い、相模が左様勧めたかと問うのを受けて、「オオ

サ」と大く、「早や落ち給えと勸むれど」を早く「イヤイヤ、一旦敵に組敷かれ、何面目に^{ながら}存えん」を力なく、「早首打てよ」で少し間を置き、「熊谷」と声を顫わせ、「ササササ、其仰せにいとど尚、涙は胸に堰上げて、まッ此の如く我子の小次郎、敵に組まれて命や捨てん、浅ましきは武士の」と迫込みて調子を乱し、「慣えと太刀も」と^{いよいよ}声を突き上げ、床の^へ抜兼ねしが」で太刀を抜兼ねる様を二度見せ、目を瞑り、打仰いで歎き、又床の^へ逃げ去ったる平山が、後の山より声高く」で屹と向うを見、後向になり、左足を前に伸し、陣扇を颯と打開て、石投の見得をし、それから正面に向直って、開いた扇は其儘斜に胸の辺へ引付けて、下から山を見上ぐる形をし、坐り六法で前へ進み、右足を三段に踏下し、右手で陣扇を開いた儘高く翳し、左手も十分伸してグット大見得をし、「熊谷こそは敦盛を、組敷乍ら助くるは、二心に極ったり」と^{のり}乗になり、床の^へ呼わる声々」で元の座に帰り、「是非もなや」と萎れて云い、床の^へ御涙を浮め給い」で一寸扇の影で泣く仕草があり、「是非に及ばず、御^{みしろし}首を」と切り、力なく扇を振上げ、声を曇らし、「打奉って御座ります」と云いて扇を下へ置き、両手を突いて物語を終ります。藤の方の嘆くのを相模が諫め励すのを聞いて、「オオ出来した、其方が申すも尤じゃ」云々と云い、敦盛の首を実検に備えるとて、首を右に捲りて上手を見、「軍次」と呼び、又左に^{ねじ}捻りて下手を見て、「軍次」と深く引張って云い、床の^へ呼わる声と諸共に、一間へこそは入相の」で藤の方に一礼し、左で刀の^{こじり}鑑を突いて立上り、袴の襷を右でポンポン三四度叩き、少し反り気味に後向になり、右の袂を^{かえ}反し、思入をして奥へ入る。青葉の笛の^{くどり}件が終って、床の時刻移ると次郎直実で^{めくらじま}首縞へ亀甲の内へ花菱総縫の^{かみしも}社袴、茶地へ牡丹唐草模様織物の著附、白羽二重の二枚下著という拵で、左脇に首桶を抱え、正面の襖を開かせて出て来ると、両女が取継るので、内見は^{かな}協わぬと云って軽く藤の方を振払い、又「ハッ」と掛声をして右の掌で強く相模を払い、二重を下り、花道の付際まで来ると、奥から義経が呼留めるので、「ハハハッ」と答えて首桶の底に掛けて置いた右手を上^へに掛直し、体を屈めながら二重に上り、義経の下手に首桶を前に、左で太刀を抜き出して左脇に置き、両手を突いて平伏する。床の^へ仰せを聞くより熊谷は、ハット答えて走出で……」一礼して右の肩衣を脱ぎ、縁端へ来て跪き、「制札引抜き、恐気なく……」で制札を引抜き、懐紙を出して泥を拭い、懐紙は其儘縁下に捨て、右手に制札を携えて元の座に戻り、右脇に置いて平伏し「先頃堀川の御所にて、御実検下さるべし」と云って、両手で首桶の蓋を上げると、相模が駈寄るので直ぐ蓋をし、相模を左脇に引寄せ、藤の方は右手に持った制札で支え、「コレコレ実検に備えし後は、御目に掛ける、イヤサ御覧に入れる、立騒いで^{びろう}尾籠千万」と早めに云い、「御騒あるウなア」と大きく引張り、床の^へ熊谷が、諫に流石はしたなく、寄るに寄られず悲しさの、千々に碎碎くる物思い」の間に制札をあしらって留める形をし、それを引く拍子に両人は二重を下りて、藤の方は上手に来、相模は下手から取継るのを、制札を左の肩に引担ぎ、右足を三段の中へ踏み下し、上から冠せてグット大見得に睨付ける。それから床の^へ次郎直実謹んで」で「敦盛卿は院の^{おんたわ}御胤……花に擬えし制札の^{おもて}面、察し申して討つたる此首、御賢慮に叶いしか、但し直実が過りにて候や」と総体早目に云い、「御批判いかアがア」と語尾に力を入れて引張り、右手で首の^{もどり}髻を持ち、左

の掌で其下を支え、右膝を立て、十分に腕を伸ばして首を差付る。義経が「由縁の者に名残を惜ませよ」というので、「コリヤ女房、敦盛の御首、藤の方へ御目に掛けよ、サ御覧に入れよ」と沈んだ調子で云い、「早く」を短く「はやーくー」と曇らして引張り、床の^へアイと計り女房は、敢なき首を手に取り上げ、見るも涙に塞がりや」で相模が「ハハ」と泣落すのを、御前を憚りて「コリヤ」と押え、目を瞑り、齒を喰締る気味合で、無意識に首を渡します。相模の愁嘆が済んで、床の^へ問えど夫は^{まばたき}瞬も、詮方涙御前を恐れ、外に云いなす詞さえ、^{なくお}泣音血を吐く思いなり」で右膝に突いて居た扇を知らず識らず外し、相模と顔見合い又義経の方を見て、恥しき思入をする。間もなく揚幕が内で遠寄を打込むとキツとなり、床の^へ仰せに直実畏まり、急ぎ一と間に」で刀を取上げ、前に横へ、義経に一礼して奥へ入る。又床の^へハッ」と答えて次郎直実、出陣の出立と」で鹿の角の前立のある兜を眼深に冠り、^{しよくこうにしき}紺地蜀江錦の鎧下、白の上帯で出て来り、鎧櫃を持参致させし事を告げ、相模が何時小次郎と敦盛とを取替えたと聞くのを、「最前も申す通り……エエ知れた事」と云って窘め、^へ仰せに直実恐れ乍ら」で一礼し、「先達で願上し^{いとま}暇の一件、かくの通り」と沈んだ調子で云い、床の^へ切払うたる有髪の僧」で兜を脱ぎ、半坊主鬘になり、^へハア有難しと立上り」云々で鎧を脱ぎ、白羽二重の著附、^{どんす}黒純子の袈裟となり、驚く女房を「ナニ驚く事のある」云々と重々しく諭し、「今より我名を^{れん}蓮」と切り、少し考えて低く、「生と改めん」と続け、「一念弥陀仏、即滅無量罪」を早目に「十六年も一と昔」を緩め、感慨に堪えぬ思いで内へ^{いき}呼吸を引き、「アア夢であったア」とシンミリと落して云い乍ら、右の掌を頭に当てて右から左へクルリと撫で、床の^へほろりと^{おと}滴す涙の露」で稍伏目になり、左に持ったる^{じゅず}珠数を爪繰り、^へ終に置く初雪の、日影に解くる風情なり」で、下手を向き、右手で懷紙を抜出して前に置き、其二三枚を取って顔に当て、始めて大きく泣きます。それから^{わりぜりふ}割白になり絃に乗り、「実に其時は此熊谷、浮世を捨て、不随者の源平両家に由縁はなし、互に争う修羅道の」と切り、「^{くげん}苦患を助くる回向の役」を張っていい、珠数を爪繰る。「我は心も黒墨の……君にも益々御安泰」で両手を突いて二重を下り、下手に来、「命が有らば」と大きく義経の「健固で暮せ」の御説でハッと上手を向き、大きく股を割った^{てい}態で立礼し、「有為轉變の世の中じゃなア」と一緒にいい、床の^へ声も涙に^{せん}搔曇り」で珠数を持替え、^へ別れてこそは」で相模が首の方に駈寄るのを隔てて、「コリヤ」と止るのが木の頭、引張の見得で幕になりました。